（一）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

たる事をしるといへる事、人の一生のたから。あたひをもつて是をいはば、堪忍の忍の字が百貫せば、千貫もすべきもの也。たる事をしるといふに高下あり。老子のたる事をしるときははづかしめられず(注1)といへるは、注(注2)にも、これたらざるをたれりとする時はつねにたれりと侍りて、たらざる上をたんぬとする事也。

されどもよのつねの人は、たらざるをたれりとする事は A なければ、ただ一鉢のまうけ、上をたすけ、かみのころも、あらしをふせぐよすがの、ある上をたれりとして外をもとめぬも、是すなはちたれる事をしれりとや申すべからん。

おほくの人、其のたる事をしらで、十をえては百をねがひ、百をえては千万無量をのぞみて、かへつてむかしこひしくなれる事、いとはかなし。なほも古今集の、

逢坂のあらしの風はさむけれどゆくへしらねば B

といへる歌など誦(ず)しかへして、およばざる事をねがひ、かなふまじきみちなど、かへすがへすもおもふまじきわざなるべし。なほもしくはかなひ、もしくはおよぶとも、大かたはとどまる事をしらば、あやふかるまじきみち也。

むかし、太秦(うづまさ)(注3)のほとりの池の蛙どもおほくあつまれる中に、大なる蛙のとび出ていへるやう、われわれ歌といひ軍(いくさ)といひ、文武二道をけがし、仙術にも通ぜる身の、泥亀づれと同じやうに四足をもつてはひまはれる事こそやすから C 。されども、天性、四足とうまれつきぬる身の、自身のちからとしてはかなひがたかるべし。いかにもして此所の薬師如来に大願をかけまゐらせ、二足をもつてあるき、二つの手をもつて用事をかなへ、万虫(注4)の至尊となりて、たとひくちなはなどがおひきたるとも、一あしも引しりぞかず、手をもつてふせぎ侍るべし、といへば、みなみなしかるべしと同じけるに、其の中に一つの蛙すすみ出て申しけるは、仏陀その報恩の礼義をまつとしもなけれども、若し其の願かなひ侍らば、なにをか、ふせにいたすべき。作善なくては、いかが、とあれば、是こそまことにいはれたりとて、あるいは水草のはなを奉らんといひ、あるいはいさごを塔とくみて仏を供養せんといへるも、くちぐちなりける。

また一ひき、をどり出ていへるは、げに、さもあるべき事ながら、いさごを塔とつまんといへるとも、はかばかしくもなりがたく、久米路の橋(注5)中たえては、なかなか人笑へにもならん事もいとはづかしく、また、水草のはなを奉るとも、手ふさにけがるる事もおそれあれば、ただわれらの存ずるは、寺中の僧の読経のときもつねづねもろごゑになきたて、御経をまぎらはし、また観念観法(注6)の床のもとまでも、つれぶしにうたひののしりてそのことさまたげ侍れば、この願成就ののちは、寺中にてこゑたててなかるることをやめらるるを作善とせられ侍るべうもや、といへば、みなみな此義にかたぶきて、一心称名の大願をおこし、一七日(ひとなぬか)(注7)参籠しければ、七日満ずるあけがたに、おほくの蛙二足をもつてたちにける。いかばかり自由なるべきとよろこびしに、おもひのほかに引かへて、両眼うしろのかたへなりしかば、ゆくべきかたにはまなこなく、まなこあるかたへは足すすまず。これやこのゆくもかへるの進退ここにきはまりければ、またいろいろ祈願しなほし、からがらむかしの身になりけるとかや。

世の中を見るに、われ人、この蛙の願だてなきにしもあらず。

（『小さかづき』による）

（注1）たる事をしるときははづかしめられず……『老子』第四十四章に「足るを知れば辱められず、止まるを知れば殆(あや)ふからず。以て長久なるべし」とある。

（注2）注……当時流布していた『老子』の注釈書。

（注3）太秦……現在の京都府京都市にある地名。

（注4）万虫……あらゆる生き物。

（注5）久米路の橋……葛城山から金峰山に通じる久米路にかけようとしたという伝説上の橋。奈良時代に、ある修行者が葛城山の山神に命じて橋を渡そうとしたが、工事は完成しなかったとされる。

（注6）観念観法……瞑想の修行法のこと。

（注7）一七日……七日間。

問一　空欄 A に入る語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　および
ロ　あたひ
ハ　ゆゑ
ニ　あひ
ホ　うら

問二　空欄 B に入る語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　せきこゆるかも
ロ　やすくもあらむ
ハ　わびつつぞぬる
ニ　ゆかしかりけり
ホ　はなぞちりける

問三　二重傍線部 a～e の語句のうち、意味の異なるものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

問四　傍線部1「あやふかるまじきみち」の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　危ないので通るべきではない道
ロ　実現が不可能であろうと思われる手段
ハ　危険を冒してはならない重要な側面
ニ　命を落としかねない不安な方法
ホ　困難に陥ることを避けられる生き方

問五　空欄 C に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　ん
ロ　め
ハ　ず
ニ　ね
ホ　じ

問六　傍線部2「作善」の内容として、本文中に提案されていたものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　蛇が襲ってきた場合に、決してひるまずに手を使ってそれを防ぐこと。
ロ　砂粒を大量に積み上げて塔のように高くし、それを仏に供えること。
ハ　太秦の池に渡す橋の工事を、中断することなく最後まで成し遂げること。
ニ　薬師寺の池にある水草の花を、手で触れて汚さないようにすること。
ホ　薬師寺の僧がお経を唱える際に、共に合唱して読経の修行をすること。

問七　傍線部3「この蛙の願だてなきにしもあらず」とはどういうことか。この解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　蛙が自分たちの願いを叶える代償として薬師如来に誓った約束を、当初のものから徐々に実現がたやすい内容へと改変してしまったように、われわれも易きに流れる傾向があるので戒めるべきだということ。

ロ　蛙が二足歩行したいという分不相応な願いを立てて、それが実現したにもかかわらずうまく活用できなかったように、われわれも身の丈に合わない願望を持つことがあるので慎むべきだということ。

ハ　蛙が大願成就のために仏に捧げるお布施として、自分たちの力で成し遂げるのが難しいことを避け現実的な手段を選んだように、われわれも自らの力量に合った言動を心がけるのが肝要だということ。

ニ　蛙が普段は僧の読経の邪魔ばかりしているのに、願い事があるときだけそれを控えて都合良く振る舞うように、われわれも普段は自分の身をかえりみずに奔放に振る舞って後悔することがあるということ。

ホ　蛙が文武両道を修めて仙術も身につけている亀と自分たちとを比較して、自分たちの方が優れているとうぬぼれているように、われわれも自らの能力を正当に見極められずに過大な願望を抱くということ。

（二）次の文章は中国明代の江盈科の随筆『雪濤談叢』の中の一節（A）に、伊勢津藩の儒者津阪東陽が評語（B）を添えたものである。これを読んで、あとの問いに答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

（A）成化中、南郊事竣撤器。亡一金瓶。時有庖人侍其處。遂官司執之、備加考掠。1不勝痛楚輒誣服。及索瓶、無以應。迫之、謾云、在壇前某地。如其言、掘地不獲。仍繫獄。2無何、竊瓶者、持瓶上金繩、鬻于市。有疑之者。質于官。竟得其竊瓶狀。問曰、瓶安在乎。亦云、在壇前某地。如其言、掘地。竟獲。蓋比庖人所指掘之地、不數寸耳。假令庖人往掘時而獲瓶、或竊瓶者不鬻金繩于市、則3庖人之死百口不能解。然則嚴刑之下、何求不得。國家開矜疑一路、所全活[X]多矣。嗚呼、斷獄豈必以速爲貴哉。

（B）凡治盗、贓證爲主。務要核實。如金瓶之獄、既誣服結案、殆將殺無辜。幸因別獲贓物、得免冤枉矣。是故贓物不獲者、未可遽決其獄。須矜疑緩死以俟平反也。

（津阪東陽『聽訟彙案』「矜疑雪冤」による）

注　成化……中国明代の元号。一四六五年から一四八七年まで。
南郊……皇帝が都の南の郊外に祭壇を築いて行った土地の神を祀る祭礼。
考掠……拷問にかけること。
矜疑……被告人に同情して刑事裁判に慎重を期すること。
贓……盗品を隠すこと。

問八　傍線部1「不勝痛楚輒誣服」の書き下し文（ただし全文ひらがな表記）として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　かたずんば、そをいたみ、たやすくふくせしをそしる
ロ　いたみにたへざれば、そはすなはちふくをしひる
ハ　まさらざれば、そをいため、たやすくしひてふくせしむ
ニ　つうそにたへずして、すなはちぶふくす
ホ　いたみしそにかたずんば、たやすくあざむきふくす

問九　傍線部2「無何」の内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　嫌疑者の自白通りに地面を掘ったが、何もなかったということ。

ロ　嫌疑者を牢獄に入れて鎖に繋ぎ拷問にかけたが、何も白状しなかったということ。

ハ　嫌疑者は何もしていないのに、冤罪で収監されたということ。

ニ　嫌疑者が盗んだものは、どこをどうさがしても発見されなかったということ。

ホ　嫌疑者が収監されてから、それほど時間が経過していないということ。

問十　傍線部3「庖人之死百口不能解」の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　料理人が死刑になることは誰がどう弁護しても避けられない。

ロ　包丁で肉を切る人でも百人を一度に殺すことはできない。

ハ　料理人が死亡したことを多くの人が異口同音に証言した。

ニ　包丁裁きの達人ならば凡人ではできない技でも可能である。

ホ　料理人の不可解な殺害事件はどんな名探偵でも解決できない。

問十一　空欄 X に入る語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　枉法　　**ロ**　贓證　　**ハ**　寃民　　**ニ**　斷獄　　**ホ**　金瓶

問十二　本文の内容に**合致しない**ものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　成化年間、南郊の祭事終了後に、祭事に用いた器物の一つが紛失した。

ロ　窃盗罪を認定するためには、盗んだ器物が発見されることが肝要である。

ハ　捕えられた二人の嫌疑者はともに祭壇付近の土の中に盗品を埋めたと告白した。

ニ　最初の嫌疑者が述べた盗品の隠し場所は、二人目の嫌疑者が事前に教えたものだった。

ホ　最初の嫌疑者はもう少しで死刑になるところであったが、盗品が発見されたので助かった。

ヘ　迅速に罪を裁くことばかりが重要であるわけではない。

（三）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ニコラウス・コペルニクスの地動説の意義をいちはやく認めたルネサンスの哲学者ジョルダーノ・ブルーノは、それをきわめて大胆に敷衍して宇宙の［A］性と世界の［B］性を提唱し、天文学史上にその名を残すことになった。彼の名はまた、長きにわたる異端審問の末に、西暦一六〇〇年、火刑台の煙と消えたことによっても知られている。ガリレオ・ガリレイのように自説を撤回すれば生き存えることもできたはずなのに、ブルーノはそうしなかった。対抗宗教改革に邁進していたローマ・カトリック教会にとっては、プロテスタント諸派への対抗上、「もっともガンメイな異端者」ブルーノが悔い改めてくれたほうが好都合であっただろうにもかかわらず、彼はそうせずに、自覚的に死を選び取ったのであった。みずから殉教者として喜んで死んでいこうと語り、生きながら焼かれても呻き声一つあげず、死の間際に差し出された十字架からは顔を背けたという。

もしブルーノがコペルニクスを読まなかったとしたら――歴史に「もし」はないとはいえ、想像してみることはできる。ブルーノへの異端審問はそれでもおこなわれただろうが、ここまで厳酷としたものにはならなかったかもしれない。彼はすみやかに悔い改め、当初の望みのとおりに、修道服を捨てて一学徒として余生を過ごしたかもしれない。ブルーノはコペルニクスを読んだ。彼がそこに読み取ったのは、地動説という天文学上の一学説にとどまるものではない。知の新たな基礎づけという彼自身の野心的な哲学プログラムに呼応する宇宙論の素材であり、不和と虚栄にまみれた人間社会のなかで真理を語るという道徳の範例であった。[1]コスモロジーとモラルの二つに関して、ブルーノは自身と共鳴するものをコペルニクスのなかに読み取っただろう。

ブルーノは専門的な天文学者ではなかったし、数学者でもなかった（当時の天文学は自由学芸のなかの数学の一つ、すなわち応用幾何学という位置づけであって、今日のような宇宙物理学ではない）けれども、生涯にわたってコペルニクスからティコ・ブラーエまでの同時代の天文学の研究成果を吸収しつづけ、自身の自然哲学に統合していった。そうして、ルネサンスの天文学者たちがついぞ放棄しえなかった実在的な［C］の概念を、まったくの錯覚だとして否定し、宇宙が無限に広がっていることを主張したのであった。【イ】

思想史家たちが指摘してきたように、ブルーノの宇宙論は、中心も周縁もない斉一的な無限空間という近代的概念を明確に提起した、ほとんど最初のものである。ブルーノによれば、宇宙は無限に広がり、どこにも中心はなく、また周縁もなく、そのなかに無限数の諸世界があって、そのそれぞれで無限数の個物がたえまなく生成消滅を繰り返しているが、それでも[2]宇宙全体は存在としては一つであるため生成も消滅もしない。生成と消滅は、個物の観点から見られた相対的な区別にすぎない。上下・左右・前後、また軽重・遅速・動静なども同様である。さらには四元素、四性質、諸天球すらも、同じく任意の観点からの相対的な区別にすぎない。宇宙の万物は存在としては一つであり、全体として果てしない連続体をなして［D］しつづけているというのである。

このブルーノの描き出した［D］の無限宇宙の姿に対して、彼から著作を贈呈されたティコ・ブラーエは拒絶を示し、その助手であったヨハネス・ケプラーは恐怖を抱いた。彼らルネサンスの天文学者たちにとって、［E］でなく規則もすべて相対的にすぎない宇宙は考えがたいものだった。ルネサンスの哲学者たちのなかには宇宙の無限性を考えた者もいたが、彼らの無限宇宙は有限の人間世界を取り巻く神的領域であって、ブルーノの考えたような地球から恒星までを分け隔てなく含み込む均質で斉一的な無限空間ではない。ルネサンスにあって、天球概念を完全に放棄して宇宙の無限性を提起し、また宇宙の階層秩序を完全に否定して空間の斉一性を主張したのは、ブルーノだけであった。

そのようなブルーノの宇宙論は、いったいどこまでコペルニクスの地動説に負うものがあるだろう。一見したところ、両者の隔たりは大きい。ブルーノの宇宙論のもっとも革新的な論点が斉一的な無限空間の概念であったとすれば、コペルニクスの取り組んだ問題、すなわち宇宙の中心は太陽なのか地球なのかという問題は、ごく些末なものに思える。無限宇宙では、無限数ある恒星のすべてが太陽であり、そのそれぞれの周囲に、地球と同様の惑星が回っているのだから。

とはいえ、ブルーノはその宇宙論の構想にあたって、たしかにコペルニクスから重要な示唆を得た。静止していると思われてきた地球のほうが実は運動している、というコペルニクスの議論は、ブルーノにとって、運動と静止の区別の相対性を示唆するものであり、さらにそれに関わる上下や軽重などのさまざまな区別までもすべて相対的なものと見なしうるという着想を与えるものであった。万物が果てしない連続体をなして［D］するというブルーノの宇宙の描像

は、そのような相対性を極限にまで押し進めたものと言えよう。加えて、恒星は年周運動が観察できないほど広大な遠方にあるとのコペルニクスの指摘は、ブルーノにとって、宇宙の最果ての天球たる恒星天が存在しないことを示唆するものであった。コペルニクス自身は宇宙を有限だと想定していたにしても、ブルーノからすれば、宇宙は閉じておらず、無限に広がっていると考える根拠を与えてくれたのである。【 ロ 】

コペルニクスの地動説を――コペルニクス自身は思いもよらないだろう仕方で――きわめて大胆に発展させたブルーノの宇宙論は、一なる無限の存在が無限に多くの様態に変容しつづけるという、ブルーノの存在論を具体的に表明したものとも言える。

ブルーノの宇宙は、無限に果てしなく広がっているのみならず、そのなかに無限の数の諸世界が充ち満ちている。このような宇宙にあっては、神は世界を別様にも創造しえたのか、この世界だけでなく他にいくつもの世界を創造しえたのか、という中世の神学者たちを長きにわたって悩ませた問題は成立しえない。というのも、神の創造できる世界はすべて複数世界として実現しているのであり、世界は実際に無限の数あるからだ。ブルーノの無限宇宙にして複数世界は、神の全能の完全なる実現であり、そこに実現している以上の可能性の余地――つまり自然を超越する領域――はない。彼の複数世界はあらゆる可能世界を汲み尽くしてしまう。可能なものは存在し、存在していないものは不可能なのである。【 ハ 】

こうしたブルーノの宇宙論と存在論は、知の新たな基礎づけという彼の哲学プログラムに呼応したものだ。存在は一であり、宇宙は無限であり、世界は複数であり、可能なものは存在しており、存在していないものは不可能であること――これを認めるなら、人間による自然の認識には確固とした根拠があることになり、神でさえもそれを覆しえない。自然にもとづく学問も、神にもとづく宗教も、確たる根拠をもって人間社会の形成に寄与できる。逆に、宇宙が無限でなく、世界が複数でないのなら、[3]なぜあれではなくこれが存在しているのかという中世以来の問題に悩まされて、最終的には計り知れない神の意志なるものに行き着くことになろう。神は恣意的なものに、世界は偶然的なものになってしまう。神が恣意的であっては、善行を薦める宗教はその根拠を失う。世界が偶然的だとすると、知識を蓄える学問はその根拠を失う。【 ニ 】

真理を語ることの範例を、ブルーノはコペルニクスのうちに読み取ったように思われる。ブルーノが繰り返し称讃するところによれば、コペルニクスは愚鈍な俗衆に対しておもねることなく、敵対的な思想潮流に対してもたじろぐことなく、嘲われ蔑まれ悪しざまに言われようとも、決然として地球の運動を語ったという。

ブルーノが宇宙論を論じた最初の著作『聖灰日の晩餐』は、そのようなコペルニクスへの称讃からはじまる。つづいて、ある晩餐の席上、地動説を理解しないオクスフォード大学出身の学者たちと不毛な宇宙論談義にいたった顚末が、喜劇風に語られていく。皮肉な笑い話に仕立てあげながらも、そこにはブルーノの怒りと憤りが隠しようもなく爆発している。彼ら「衒学者ども」は自分の発言に責任を取らず、プトレマイオスやアリストテレスの文言を理解せずに並べて、ただ周囲の人々にいい顔を見せようとするばかりである。プトレマイオスの天動説とコペルニクスの地動説、アリストテレス哲学とブルーノ哲学のあいだの学問的争点を議論しようにも、まったく話にならない――そこには虚栄しかない。【 ホ 】

ブルーノによるコペルニクスへの称讃は、すぐさまヒルガエって、[b]衒学者への非難になる。ブルーノの著作の数々のなかで地動説はもちろん学説として主張され、天動説より正しいとされる根拠も学問的に提示されるが、それは科学的な考察というにとどまらず、真理を認めることのできない虚栄に満ちた人間とその社会への診断と一続きになっているのである。

（岡本源太「コペルニクスを読むジョルダーノ・ブルーノ」による）

問十三 傍線部a・bにあてはまる漢字を、それぞれ記述解答用紙の**問十三**の欄に楷書で記入せよ。

問十四　空欄 A ・ B ・ E にあてはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　A 単一　B 複数　E 絶対
ロ　A 無限　B 単一　E 連続
ハ　A 複数　B 単一　E 無限
ニ　A 無限　B 複数　E 有限
ホ　A 絶対　B 相対　E 連続

問十五　傍線部1「コスモロジーとモラルの二つに関して、ブルーノは自身と共鳴するものをコペルニクスのなかに読み取った」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　ブルーノはコペルニクスの地動説をコペルニクスとは異なった方法で発展させ、自身の宇宙論を構築し、宗教や学問を根拠づける真理を語るモデルをそこに見出した。
ロ　ブルーノはコペルニクスの地動説から、プトレマイオスの天動説やアリストテレス哲学を信奉する人々と議論するために必要な学問的争点を学んだ。
ハ　ブルーノは地動説を主唱するコペルニクスの生き方を自身の人生のモデルとして、俗衆におもねらず、自らに敵対する思想にもたじろがない勇気をそこから学んだ。
ニ　ブルーノはコペルニクスの地動説から、宇宙が有限であることを再確認し、全能の存在である神の意志が恣意的でも偶然的でもないことの確証を見出した。
ホ　ブルーノはコペルニクスの地動説から、コペルニクス自身が思いもよらない可能世界に関わる思想を読み取り、自然を超越した神の意志を証明することになった。

問十六　空欄 C にあてはまる語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　宇宙
ロ　惑星
ハ　恒星
ニ　地球
ホ　天球

問十七　本文中には次の一文が脱落している。入るべき最も適切な箇所を本文中の【イ】～【ホ】の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

人間社会は信においても知においても基盤を欠いて、かぎりない不和のなかに埋もれていってしまう。

問十八　傍線部2「宇宙全体は存在としては一つであるため生成も消滅もしない」の内容に対応する、空欄 D にあてはまる語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　寂滅為楽
ロ　生々流転
ハ　有為転変
ニ　輪廻転生
ホ　永劫回帰

問十九　傍線部3「なぜあれではなくこれが存在しているのかという中世以来の問題」の内容の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　神はなぜ世界をわれわれの世界だけに限定し、幾つもの別の世界が存在しうる複数世界として創造しなかったのか。

ロ　神はなぜ宇宙を一なる無限の存在として創造し、そこに含まれる世界をも単一のものとして創造したのか。

ハ　神はなぜ恣意性を排して、世界が単一か複数かという問いに解答を与えず、宇宙が有限であることを偶然の現象として位置づけたのか。

ニ　神はなぜ可能世界が複数世界によって汲み尽くされてしまうことを許容することで、人間の自然認識に根拠を与えたのか。

ホ　神はなぜ可能なものは存在し、存在していないものは不可能であるということを自らの全能の意志によって覆すことができなかったのか。

問二十　本文の趣旨を踏まえて、ブルーノとコペルニクスとの関係の説明として適切なものを次の中から**二つ**選び、解答欄にマークせよ。

イ　ブルーノは地動説が天動説よりも正しいことを証明するに際して、地動説を嘲笑した衒学者たちへの怒りを隠さなかったコペルニクスに真理の使徒としての顔を見出した。

ロ　ブルーノはコペルニクスに触れることで、コスモロジーの学説にとどまらず、そこから彼自身の知の基礎づけにも呼応する、人間社会を洞察するためのモデルを見出した。

ハ　ブルーノは世界を区別する相対性についてコペルニクスの宇宙論から示唆を受け、そこから人間社会が相対的なものであるという真理を学び取った。

ニ　ブルーノは真理を認めることのできない衒学者たちとの議論を強いられる自らの状況が、地動説を主唱するにあたって敵対者から攻撃を受けたコペルニクスの運命を繰り返していると考えていた。

ホ　ブルーノは宇宙が神的領域であると捉えたコペルニクスと自らの説との差異を認めながらも、宇宙が階層を持たない斉一的なものであることが彼のコスモロジーであると理解した。

ヘ　ブルーノは宇宙が無限であることにすでに気づいていたコペルニクスの宇宙論を独自に発展させ、宇宙が果てしなく広がっていて、そのなかに世界が含み込まれていることを明らかにした。

ト　ブルーノは地動説を提示したコペルニクスの考えを発展させ、生成と消滅などの区別が相対的なものであるという発想を得て、宇宙は閉じられることなく地球から恒星までを含む斉一的な空間であることを主張した。

（四）

次の文章は、ジル・ドゥルーズによる「ノマドロジー（ノマド論）＝遊牧民的論理」についての考察である。この論理が現代社会においてもつ意味に留意しつつ文章を読み、あとの問いに答えよ。

個々のテリトリーの形成、各テリトリー同士の距離による交流、環境内における横断性、個体のほつれといった問題は、ドゥルーズ＝ガタリにおけるノマドロジーの問題でもある。ノマドとテリトリーの結びつきはそれらが対蹠的であり、もっと言うなら衝突しあうように見えるがゆえに、ともすれば意外に思われるかもしれない。だが、この結びつきは、一見した以上に緊密なものだ。ドゥルーズの著作のトルコ語訳者は、ドゥルーズの言葉を次のように伝えている。「トルコ－モンゴルにおけるノマドの状況を私に喚起したのは、ドゥルーズである。〔……〕テリトリーはむしろ、一人の人間や人間集団が、自分の場を切り開いてそこに居座り、テントを張るような場所と関連する。このテントのなかで、ノマドはある決まった期間のあいだ生きるのである。〔……〕ノマドのテントが設営される場所というのが、このときジルが私にくれた説明なのだが、このとき彼は椅子に座り、私は彼の横で地べたに座っていた。そして彼はこう言った。「あなたが座っているその場所、そこがあなたのテリトリーだ」、と」。ここで示唆されているように、テリトリーとノマドは、少なくとも『アンチ・オイディプス』や『千のプラトー』においては、決して対立するものではなく、テクスト上で遥かに繊細な関係を紡ぐものである。あとでより仔細に見るように、固有性ないしは独占的所有について批判しながら、しかし同時に占拠すること、テントを張ることという問いが浮上してくるのだ。すなわち記号系において、象徴界－専制君主とは別のしかたでということが問われているのと同様に、テリトリー論とノマド論の双方において、資本主義的－国家装置的な独占所有とは別のしかたで占拠し、保有し、享楽することが問題になっているのだ。それはまるでノマドとテリトリーが、もちろん同一化することなく、しかし双方が所有でも無所有でもない、中間領域において相互に漸近してゆくかのような事態である。

簡単な確認をしておこう。テリトリー論は、ある土地、ある場、ある領域における個体の棲息様式、つまり、自分がそのうちに一定の場を占める領域をどのように切り出し、どのように把握し活用するか、そこでどのように存在するか、いかにその領域とかかわるかという、生態学的な問題を指し示している。それが、自己固有の土地を区切り固有のものとして排他的に所有するという、限定された狭い意味で理解されるなら、それはまさに、土地や時空間の組織化のあり方、個体自身の存在のあり方、個体と土地の関係のあり方などにかかわる、集団的な生存様式となろう。その一方でノマド論はこれらの論点について、閉鎖した固有領域を切り分け、それを領有するのとは異なる[1]別の生存様式を呈示する。それは、個体がおのれに固有の領域をつくることなしに土地や時空間とかかわるしかたのことであろう。そして、そのことによって、土地への定住とその独占所有に疑問符がつきつけられる場面を注視しながら、所有という外観が発生する際の条件を明らかにし、それを根底から批判的に検討するひとつの視座として機能する。つまりそれは排他的な領土所有とは別のしかたで大地に棲みつくことを思考しながら、逆向きの光によって、独占的所有の条件を批判的に照らし出し、所有とは異なるあり方を積極的に呈示してみせるのだ。

それゆえ、ドゥルーズにおけるノマディスムとは、ある領土から別の領土への遍歴ではない。つまり、ある私有地＝固有性から別の私有地＝固有性へと移動することではない。むしろそれが意味するのは、一切の領域の私有＝固有性それじたいの廃棄であり、所有の対象となるとされる領域の同一性の停止であり、さらには、そうした領域に棲息する主体自身の同一性の宙吊り――それは『千のプラトー』においては顔貌の解体へと連なる――といった事態である。一言でいうなら、ノマド的思考は、排他的で自己同一的な固有性という「形式」全般を一撃で括弧に入れてしまうのである。ある領土から別の領土へと移るだけで、行く先々の領土の固有性が温存されたままであるなら、理論的な地盤はまったく揺るがぬまま、放置されているに等しい。したがって、[2]ある領域から別の領域へと「渡り歩くこと」（たとえばある仕事から別の仕事へ、あるアイデンティティから別のアイデンティティへ）は、じつのところ、ノマドとはほとんど関係がない。こうした渡り歩きは、点＝アイデンティティに従属した行路であり、様々な土地へと重たい自我と同一性形式が移動してゆくだけだろう。問題はたんに場所や職業を移りゆくのとは別のところ、すなわち、固有性という形式そのものを揺さぶり、宙吊りにすることにある。ところで、形式を相手にするからには、固有のものとして我有化される対象が、土地であれ、事物であれ、芸術作品であれ、個体概念であれ、性であれ、社会的役割であれ、自己同一性であれ、対象の中身はある意味では問題ではないということだ。それは、どのような対象であれ、「固有性＝所有」という構図じたいを、すべてまとめて標的にするのであり、テリトリー＝領土論の射程はきわめて広大なものとなる。

ところで、ドゥルーズ思想において、「領土」や「ノマド」の主題が広く認知されるようになったのは、『アンチ・オイディプス』、『千のプラトー』といったガタリとの共同作業に起因している。だが、ドゥルーズが「ノマド」と「領土」という対比の定式化を行ったのは、ガタリとの共同作業以前に遡る。ガタリと出会う前年、一九六八年の『差異と反復』のなかでドゥルーズは、「固有性＝私有地」、「領土」との対比を鮮明にしながら、ノマディスムについて書いている。『アンチ・オイディプス』や『千のプラトー』とはちがって、『差異と反復』において、「領土」と「ノマド」は、鋭利に対立する語彙である。

ドゥルーズのいう「土地の問い」の第一のタイプは、土地、領域、場の分割をめぐる思考であり、生存圏の分割をめぐる思考である。それは、他者との共有なき排他的な独占領域の裁断、囲いで覆われた私有地を定めるべく境界画定をすることである。固有性＝私有地や領土と「同一視」しうるものとして、ここで指示されているのは、神や人物や事物などに固定的に割り振られる社会的な属性、述語、活動領域、能力や、種としての性質であり、遅かれ早かれいずれ滅ぶ植物、動物、鉱物の運命でもある。それは、まるで柵のうちに囲い込まれているかのように、自己に対して本来的に賦与された固有性をまっとうしながら、その外に出ることなく死ぬ存在者を端的に示している。固有性の思考は、まさしく本質的かつ本質主義的なしかたで、[3]ある個体の命運を決する「裁き」のシステムであり、ある個体に生ずる一切が、私有地の限界のうちに含まれているのである――ちょうど窓も扉もない閉鎖されたモナドのうちに、その過去、現在、未来の述語すべてがすでに含まれているように。ライプニッツのいう「主語への述語の内属」は、主体の持ち分＝運命を、その「内的な固有性＝所有物」として決することであろう。

『差異と反復』のノマド論は、社会形成体――国家に抗する未開社会や遊牧社会――の問題というより、遥かに存在論に近接したものとなる。つまり、ここでドゥルーズがノマディスムを喚起しながら表明しているのは、こうした領域画定的な思考法を存在論的に解体する作業であり、あらかじめ本質主義的なしかたで切り分けられた「固有性」、「領域」、「範疇」、「属性」、「限界」、「持ち分」、「運命」などには、決して還元されることのない存在論の様式の開拓である。それは、生に対して、超越的なしかたで外側から限界を課すことのない生存様式の創出を意味する。なぜなら、生の外でつくられた固有性が運命のように生に課されるというより、まさに生こそが、そうした特性や形質をある時間だけ持続する「固有名」＝「多様体」として、無目的に発生させつくりだすからだ。「生は絶対に正当化不可能であり、そのことは生が正当化される必要がないだけにいっそう確実である」。ドゥルーズは、生きることよりも上位に立ついかなる超越的な基準も認めずむしろ、そうした基準を測るのは生のほうであるという姿勢を示す。先行する原理や上位の原理を一切持たない無原理的（アナーキー）な生こそが価値評価を行うものであって、生より高次の価値から、生に対して評価や判断を下す行為はすべて越権的であると言ってもよい。ドゥルーズは、産出されたものである価値や、裁きの基準となる法や規則が、産出する力能である生に対して、[4]論点先取的なしかたで覆いかぶさってくるという転倒を斥ける。土地＝本質を分割してカテゴリーの升目（社会的、性的、人種的、政治的、宗教的な属性）をつくり、その升目の一つひとつに個体を割り振る定住的な思考法においては、各個体に割り振られる分け前が、当の個体から独立に外から決せられるが、そうした様式とはちがって、ノマド的思考においては、カテゴリーの升目に分かたれることのない、グラデーション状の《存在》の領野のうえに、運命を画定されない特異性や強度が分布し、どのような存在者であれ――鳥であれ、ダニであれ、蛇であれ、排泄物であれ、神であれ、現人神であれ――、《存在する》ということの意味にはちがいなどないということが肯定される。いわゆる「存在の類比」が存在者のあいだに、垂直状に位階序列化されたカテゴリーをつくり、階層の異なるカテゴリーのそれぞれに、異なる意味の《存在＝本質》を割り振るのに対し、一義的な《存在》では、平面上に散らばった様々な存在者に対して等しく同じ意味で「存在する」ということが言われるのだ。[5]ノマディスムとは、存在の類比のヒエラルキーに抗する、存在の一義性のアナーキーである。

（堀千晶『ドゥルーズ　思考の生態学』による）

問二十一　傍線部1「別の生存様式」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　自分が一定の場を占める領域をどのように切り出し、いかにその領域とかかわるかという生態学的な問題であるテリトリー論に対し、個体が自己に固有の領域を超越し閉鎖した固有領域を切り分けることで土地や時空間とかかわる生存様式。

ロ　自分が一定の場を占める領域をどのように切り出し、いかにその領域とかかわるかという生態学的な問題であるテリトリー論に対し、土地への定住とその独占所有に疑問符がつきつけられる場面を注視しながら境界画定を模索する生存様式。

ハ　ある土地や領域を自己に固有のものとして排他的に所有し、境界を管理しながら棲みつくテリトリー論的生存様式に対し、ある場を資本主義的－国家装置的な独占所有とは別のしかたで占拠することで、逆向きの光によって疑問符をつきつけながら、土地への定住を享楽する生存様式。

ニ　ある土地や領域を自己に固有のものとして排他的に所有し、境界を管理しながら棲みつくテリトリー論的生存様式に対し、ある場をノマドとテリトリーが中間領域において相互に漸近してゆくかのような事態にすることで、土地の非排他的占拠に疑問符をつきつける集団的な生存様式。

ホ　ある土地や領域を自己に固有のものとして排他的に所有し、境界を管理しながら棲みつくテリトリー論的生存様式に対し、ある場を占拠しテントを張るという所有でも無所有でもない実践をとおして、独占的所有という観念が発生する条件を明らかにし、それとは異なるあり方を示す生存様式。

問二十二　傍線部2「ある領域から別の領域へと「渡り歩くこと」〔……〕は、じつのところ、ノマドとはほとんど関係がない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　ドゥルーズにおけるノマディスムとは、あるアイデンティティから別のアイデンティティへと渡り歩くことではなく、重たい自我と同一性形式を離れて行く先々の領土の固有性を確認することによって、究極的には個体概念やその社会的役割の解体から顔貌の解体へむかうことであるから。

ロ　ドゥルーズにおけるノマディスムとは、あるアイデンティティから別のアイデンティティへと渡り歩くことではなく、固有性という形式そのものを揺さぶり宙吊りにすることによって、重たい自我と同一性形式をある私有地＝固有性から別の私有地＝固有性へと移動させることであるから。

ハ　ドゥルーズにおけるノマディスムとは、アイデンティティや固有性を温存したままある領土から別の領土へと移動することではなく、一切の領域における固有性を廃棄し、所有の対象となる領域の同一性を停止し、究極的には主体自身のアイデンティティを宙吊りにすることであるから。

ニ　ドゥルーズにおけるノマディスムとは、アイデンティティや固有性を温存したままある領土から別の領土へと移動することではなく、所有の対象となる領域に棲息する主体自身の同一性を宙吊りにすることによって、同一性という形式を保ちつつテリトリー論の射程を広大にすることであるから。

ホ　ドゥルーズにおけるノマディスムとは、アイデンティティや固有性を温存したままある領土から別の領土へと移動することではなく、排他的で自己同一的な固有性という「形式」を括弧に入れ、さまざまな固有性を獲得しうるように「固有性＝所有」という構図じたいを標的にすることであるから。

問二十三　傍線部**3**「ある個体の命運を決する「裁き」のシステム」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　「土地の問い」の第一のタイプとしての生存圏の分割をめぐる思考は、他者との共有なき排他的独占領域を裁断することに存しており、その結果生ずる、どんな個体にも、自己に対して本来的に賦与された固有性に従い、本質主義的なしかたでその限界内でのみ生きるよう命ずるシステムのこと。

ロ　「土地の問い」の第一のタイプとしての生存圏の分割をめぐる思考は、他者との共有なき排他的独占領域を裁断することに存しており、その結果生ずる、どんな個体にも、遅かれ早かれいずれ滅ぶ植物や動物のように、自ら選び取った固有性をまっとうしながら死ぬよう命ずるシステムのこと。

ハ　「土地の問い」の第一のタイプとしての生存圏の分割をめぐる思考は、私有地を定めるべく境界画定をすることに存しており、その結果生ずる、どんな個体にも、自己の私有地を固有のしかたで裁断しつつ、割り振られる社会的属性に応じて生きるよう命ずるシステムのこと。

ニ　「土地の問い」の第一のタイプとしての生存圏の分割をめぐる思考は、固有性＝私有地や領土と「同一視」しうるものとして社会的属性を固定的に割り振ることに存しており、その結果として、どんな個体にも、閉鎖されたモナドに含まれる自由な述語として生きるよう命ずるシステムのこと。

ホ　「土地の問い」の第一のタイプとしての生存圏の分割をめぐる思考は、固有性＝私有地や領土と「同一視」しうるものとして社会的属性を固定的に割り振ることに存しており、その結果として、どんな個体にも、柵のうちに囲い込まれているかのように、種の本能一般に従って生きるよう命ずるシステムのこと。

問二十四　傍線部**4**「論点先取的なしかたで覆いかぶさってくるという転倒」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　生きることは本来、超越的基準によって正当化される必要がない無原理的（アナーキー）なものであり、先行する原理を持たず絶対に正当化不可能な産出する力能である生こそが価値評価を行うはずだが、その力能に対してすらもともと超越していた法や規則が一切を裁き評価するという事態のこと。

ロ　生きることは本来、超越的基準によって正当化される必要がない無原理的（アナーキー）なものであり、その力能は「固有性」「範疇」「持ち分」などを無目的につくりだす存在論的様式であるにもかかわらず、社会の法や規則が越権的に生を裁き評価するという事態のこと。

ハ　生きることは本来、それより上位の原理を一切持たない無原理的（アナーキー）なものであり、生こそが絶対に正当化不可能な法や規則を産出する力能であるにもかかわらず、その力能に先立って存在する高次の価値や超越的基準のほうが生に対して評価や判断を下すという事態のこと。

ニ　生きることは本来、それに先行する原理や上位の原理を一切持たない無原理的（アナーキー）なものであり、生こそはどんな超越的基準によっても正当化される必要がない産出する力能であるにもかかわらず、その力能の産物である法や規則のほうが生を価値評価するという事態のこと。

ホ　生きることは本来、それをうわまわる上位の原理を一切持たない無原理的（アナーキー）なものであり、生こそが「多様体」としてさまざまな特性や形質を無目的につくりだすのだが、それらに先立つ超越的基準が不可避的に存在するがゆえに生のほうが逆に評価されるという事態のこと。

問二十五　傍線部5「ノマディスムとは、存在の類比のヒエラルキーに抗する、存在の一義性のアナーキーである」とある。ここで言う「存在の一義性のアナーキー」とはどのようなことを意味しているか。本文中で解読されたドゥルーズの思考を踏まえつつ、**一二〇字**以上**一八〇字**以内で説明せよ（解答は記述解答用紙の**問二十五**の欄に楷書で記入すること。その際、句読点や括弧・記号などもそれぞれ一字分に数え、**必ず一マス用いること**）。